

田倉川と暮らしの会 第6号

2000年1月1日発行



十一月リトリートたくら秋のイベントは、たくさんの家族連れで大にぎわいだっただ。 (写真上) 正午頃には駐車できる場所はすべて埋め尽くし、車の列が古木の集落までつながって動かなくなってしまった。会員の面谷さんは、あまりにも大勢の人波に仰天しながら汗だくで駐車誘導をしていた。JRの駅からは満員のシャトルバスが3台連なって運んでいた。てくてく歩いてくる中年夫婦も多く見られた。今日はめずらしく快晴、しかも暖かい日だ。田倉川の流れとのどかな集落を眺めながら赤谷の谷あいにとどり着く。ここは懐かしい里山のふところだ。土地の人たちの飾らない言葉と笑顔のもてなしにハイカーたちは大きな郷愁のため息をついているようだ。

通信を出してから少しずつ赤谷を訪れる人が増えてきた。十月、武生国高と東公民館の美人主事が下見に来たので案内した。リトリートたくらから赤谷の林道を谷筋に約一キロほど登ると、森の中に美しく大きな滝が白く光って見える。二号石積みの堰堤だ。ここからさらに一キロ曲がりくねりながらいっきょに登り谷間を脱すると突然視界が広がり歓声を上げる。北東の優しい峰峰が一望できるのだ。

(写真右) 西側には大平の山抜け跡がすり鉢のように滑っているのもはっきり分かる。つい今ほどイノシシがほじくったという餌場の跡を発見した。さらに帰り道角の短い大きなカモシカと鉢合わせして驚いた。下見の後二十名ほどの人を連れて、明治の砂防堰堤見学を兼ねたハイキングにマイクロバスでやってきた。伊藤さんや面谷さんは、軽自動車を出して赤谷を案内し、歴史や山の生活、動植物の自然解説を引き受け感謝された。



● 赤谷は山村空間博物館に最適

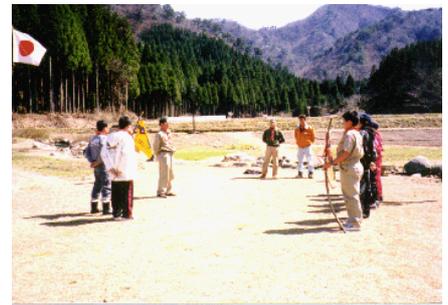


明治の堰堤群ひとつの短い谷にこれほどたくさんの明治の堰堤があるのは珍しい。後世に遺したい伝統的農林業施設である。具体的整備内容として、約二キロメートルの赤谷川に存在する九箇所の堰堤と林道の復元整備が考えられる。コア施設は、リトリートたくらを活用する。展示空間として、明治の堰堤群と林道の復元整備、農山村の美しい景観の保全整備である。展示施設は、伝統的農業施設の学習と研究の場、農山村住民と都市住民との交流

の場として活かされる。事業として、林道の整備、堰堤群の復元整備、展示施設の整備などが提案される。以上のように、赤谷は里山の懐を演出する資源が豊富である。山村空間博物館として交流と自然学校の場にしていきたいと願っている。(写真は、リトリートたくらロビーに掲示されている田倉川と暮らしの会ニュース、エコウォーキング、沢釣りの人たちに人気)

● 青少年を受け入れる滞在型自然学校

リトリートたくら付近は、田倉川と赤谷があり、川や水辺が生物との共存空間であり、格好の自然学校のフィールドである。昨年は、武生ロータリークラブのインタープリターセミナー、ドラゴンリバー交流会、HINOリバーサロン、ガールスカウトやボーイスカウトの野営訓練、武生公民館活動など受け入れた。ラジオ大阪が取材に来て関西一円に三十分も放送してくれた。近く「近畿川ものがたり」に赤谷や私たちが紹介される。発刊が待ち遠しい。このように小中学生、高校生から公民館活動の一般の方などたくさんの方が訪れ、山村の自然環境に刺激しながらア会員との交流を深めた。(写真は、ボーイスカウト武生六団の小中高校生隊員の環境学習と野営訓練)



閉ざされたままの小学校。門戸を大きく開きたい。

● 先人達の河川技術に学ぶ

～ 武生工業高校赤谷を野外研究のフィールドに～

当会では、高校生の環境教育を支援することになった。赤谷の河川と明治の施設から環境を配慮した景観技術を学んでもらおうと、伊藤会長が同窓会(土睦会)会長をしていることもあり、武生工業高校都市建築科に呼びかけ実現した。夏休みを中心に滞在型野外研究を計画している。(共同参加者を募っています。)